

初期のアメリカ演劇——オニールまで

江 本 澄 子

I

アメリカ新劇運動の黎明は 1911 年、アイルランドのダブリンから海を渡ってアメリカ合衆国へ巡業にやって来たアベイ劇団 (Abbey Theatre) によってもたらされた。彼等は自国の劇作家シング (J. M. Synge) やイエーツ (Yeats) やグレゴリー夫人 (Lady Gregory) 等の劇曲を紹介し乍ら、そのアイルランド劇特有の詩的雰囲気 に 充 ち た 舞 台 を ア メ リ カ の 観 衆 の 前 に 繰 り 拵 げ て み せ た 。 こ れ ら の ア イ ル ラ ン ド 独 自 の 異 教 的 な 伝 説 に も と づ い た 審 美 的 な 舞 台 ， 或 い は 国 民 感 情 を 情 熱 的 に う たい あ げ た 気 迫 に 満 ち た 舞 台 を 目 の 前 に し て ， ア メ リ カ 人 達 は そ の 芸 術 的 な 香 り の 高 さ に 完 全 に 魅 了 さ れ て し ま っ た 。

彼らにとってそれは驚くべき新鮮な刺戟であった。何故ならそれまで彼等の世界には演劇と名づけるよりも“お芝居”と呼ぶにふさわしい舞台しか持たなかったからである。

劇場と云うものは卑俗な大衆に猥雑な娯楽を提供する場所ではなかったし、劇作家と云うものは小説家や詩人とは比較にならない教養の低い保守的な因襲的な職人として考えられていなかった。劇場の数こそ、ニューヨークでは当時すでに 40 の多きに達していたが、そこで演じられているものは well-made play やドタバタ喜劇を一歩も出るものではなく、俳優達も大げさな演技で観客を湧かせていた。

しかし、1898 年に終結した米西戦争を契機として、アメリカの海外市場の獲得と共に急速に発達を遂げた産業ブルジョワジーとそれに対立する

労働階級の争いは日増しに激烈化し、1905年シカゴにおいて、万国労働者組合の結成へと発展した。

労働者層の間からは真面目な欧州近代劇を求める声があり、一部の素人劇団の手によって上演された事もあった。それと同時に20世紀初頭には、ヨーロッパから続々と移民が相次いでアメリカに移住して来た。

ドイツ人、フィンランド人、ハンガリヤ人、ユダヤ人、ロシア人、等々……。そして彼等は夫々の故国の演劇をこの新しい大陸に持ち込んで来たのである。彼等は演劇サークルを作って、厳しい労働の余暇に、自分達の舞台上に再現される祖国の生活や風土に涙しながら切ない望郷の念を辛うじて抑えたのである。

しかし、言語の障壁はなお、彼等とアメリカ人達の文化交流をさまたげていた。そしてヨーロッパの有名な劇作家の名前も一部の演劇愛好家以外にたいした意味を持たなかった。

しかし、その一部の愛好家の手に依ってアメリカの近代劇の芽は徐々に土壤中にその根をはぐくみ、のばしていた。ブロンソン・ハワード (Bronson Howard, 1842-1908) や、オーガスタス・トマス (Augustus Thomas, 1857-1934) や、クライド・フィッチ (Clyde Fitch, 1865-1909) なども従来の easy-going な演劇の傾向からの脱皮を試み、より写実的な要素をそれらの作品に加える事に努力した。

劇作家と云うよりむしろ高邁な詩人として名声のあったウィリアム・ムーディ (William V. Moody, 1869-1910) は、1906年にニューイングランド生れの娘と、アリゾナの開拓者の若者との出会いと、彼等の結婚を主題として、ピューリタニズムの持つ伝統と、フロンティア精神とが、対立し、和合していく過程を心理的に描いた作品「大分水嶺」"The Great Divide" を発表し、アメリカ演劇界に高度な新風を送った。

こう云う情勢下にあつて来訪したアイルランド劇団の公演は、アメリカ

演劇にとって覚醒剤として強烈に作用した事は云うまでもない。この様にしてヨーロッパの近代劇に刺戟されたアメリカ演劇界も 1910 年代になってようやく創造的な近代劇への方向を定めたのであった。

アメリカ独自の新劇発生基礎となったのは各地にある大学であった。先づ、ハーバード大学のベイカー教授 (George Pierce Baker, 1866-1935) は劇作、演出、演技に関する講座をもうけ、実際に実験的な舞台を通して学生達を指導した。彼の講座番号が 47 であったところから “The 47 Workshop” と名付けられ、そこからは、オニール (Eugene O’Neil, 1888-1953)、バリー (Philip Barry, 1896-1949)、ハワード (Sydney Howard, 1891-1939) その他、数多くの劇作家、演出家をうんだ。この方法によってコロンビア大学のマシューズ (Brander Matthews) 教授や、北キャロライナ大学のコック (Fredric Koch) 教授もそれぞれの大学の演劇科において大きな功績をもたらした。

1911 年から 12 年にかけてアメリカ各地に起った小劇場運動はこうした大学の活発な劇演活動に刺戟された結果であった。シカゴのモーリス・ブラウン夫妻のシカゴ小劇場 (The Little Thertre), ボストンのライマン・ゲール夫人の玩見劇場 (The Toy Theatre), トマース・ディッキンソンのウィスコンシン劇場 (Wisconsin Theatre) デトロイトのアーツ・アンド・クラフト・シアター (The Arts and Crafts Theatre) 等が相次いで誕生した。

これらの劇団は、イブセンその他の作家の作品の舞台上演の他に雑誌や脚本等を発行する事によって、アメリカ劇作家の養成から次第に大衆の演劇に対する趣向を変えていった。

1914 年には後はシアター・キルド (Theatre Guild) になり、アメリカ演劇の中心となったワシントン・スクエア劇団 (The Washington Square Players) が、翌 15 年にはマセチューセッツ州のプロヴィンスタウンに於

て、プロヴィンスタウン劇場 (Provincetown Players) が創立された。

ワシントン・スクェア劇団は 1914 年から 18 年の間に 62 の一幕劇と 6 の多幕劇を上演した。

プロヴィンスタウン劇場ではオニール (Eugene O'Neil), クック (George C. Cook), グラスベル (Susan Graspell), ジョーンズ (Robert E. Jones) 等が中心となったが、ポール・グリーン (Paul Green) もここから生まれた。オニールの「カーディフを指して東へ」“Bound East for Cardiff” を始めとし、彼の 1920 年代の作品は殆んどこの劇団で初演されている。同じ頃、隣人劇場 (The Neighbourhood Theatre) が生まれ、1915 年はまさに小劇場運動がその頂点に達した年であった。

この運動もアメリカの第一次大戦への参加で挫折したかに見えたが、急速にその成果をもたらし、短い期間の活躍ではあったが、今日のアメリカ演劇精神の基盤をきづきあげたのである。

II

アメリカの近代劇の誕生はユージン・オニールの出現をまって始まる…と云っても過言ではあるまい。

オニールが始めて書いた多幕劇、「地平線の彼方」“Beyond the Horizon” は 1920 年 2 月、ブロードウェイで 160 回連続上演、尚、ピューリッサー賞を受賞した。その秋には「皇帝ジョーンズ」“Emperor Jones” を発表し、彼の劇作家としての地位を確立し、アメリカ演劇を世界的水準にまで高めた。

海にあこがれながら兄アンドリュウの許嫁ルースと恋におちたためにあこがれの海にも出られず、不幸な一生を送るロバート、弟に許嫁をとられたため、心ならずも海へ出て行かねばならなかったアンドリュウ、又、真実の愛を求めてロバートと結婚したルース、これらの人達の心の葛藤をテーマとしたこの文学の香り高い悲劇が、軽喜劇や冒険劇によって占領され

ていたブロードウェイの商業演劇にいどみ、見事突破口を開いた。これにより、当時の若い劇作家達は大いに刺戟され、事実、1920年を契機にモダン・ドラマの作家達が次々とあられ、アメリカ演劇の大転換期を形づくったのであった。

ユージン・オニール (Eugene Gladstone O'Neil, 1888-1953) は、ニューヨーク市の現在、ブロードウェイ劇場街となっているあたりで呱呱の声をあげた。

父はその当時の人気俳優で、当り役の「モンテ・クリスト伯」を持って巡業に出ている事が多かったので、幼いオニールもその旅先のホテルや舞台裏で育てられた。母は音楽的才能に恵まれた女性であった。

この2人はもとはと云えばアイルランドからの貧しい移民であったが、オニールが生まれたのはすでに父親が世に出てから後の事であり、経済的にはさして不自由はなかった。少年期のオニールは、7才迄父の一座と旅廻りをし、その後は両親の宗教であるカトリック系の寄宿舎のある学校に送られたが、宗教的改律に反抗して、しばしば転校を余儀なくされた。

プリンストン大学も中途退学し、その後かなり放浪な生活を送るようになる。学業、最初の結婚に失敗した彼は、平水夫、金鉱探索人、波止場の浮浪者、新聞記者と転々と職を変えた揚句、一番長かった船乗り生活の不摂生がたたって胸を病み、サナトリウム入りとなる。

そこでの半年の安静が彼に勉強、反省の機会を与え、劇作家として再出発を志すところとなった。

1913年、退院するや、猛然と筆をとり、その1年間に自分の船乗り生活からテーマを取った一幕物を沢山習作した。入院中愛読したストリンドベリイやイプセンの影響のみられるこれらの作品をまとめて最初の著作集として同年に、父親が自費出版してやっている。

1914年、ハーバード大学のベイカー教授の門を叩き、有名な The 47

Workshop の教室に通ったが、すでに創作の基礎を修得済みのオニールにとっては満足出来る様な講義もなかったのか、翌年、そこを去り、グリニッチ・ヴィレッジの住民となり、酒を友としながら執筆を続けた。

1916 年の夏、マセチューセッツ州の避暑地、プロヴィンスタウンに遊んだが、ここでジョージ・クラム・クックとその夫人のスーザン・グラスペルを中心とする若い演劇愛好家達と親交を持つ様になった。彼等は棧橋の小さな魚置場を改築した祖末な劇場で芝居をしていた。そこへトランク一杯の脚本を持ったオニールが現われた。彼等の劇団、プロヴィンスタウン劇場でオニールの「カーディフを指して東へ」“Bound East for Cardiff” が上演され、クックが中心人物のヤンクの役を勤め、オニール自身も出演し、波止場の劇場で船乗りの生活を扱った芝居と云う詭え向きの条件で、観客に非常な感銘を与えた。

その後、この劇団はニューヨークに進出し、アメリカ人作家の紹介をモットーとする劇作家劇場 (Playwrights Theatre) として活躍を続け、彼自身も海洋劇を次々と書いて舞台にのせた。

彼の作品は 1913 年から 18 年の習作時代、1919 年から 24 年頃迄の自然主義及び表現主義の長篇劇時代、1925 年次後の超自然主義時代と 3 期に大別出来る。

初期のものは放浪時代の生活、特に船乗り生活から自己の体験を題材とした一幕物が多く、「鯨油」“Ile” や「綱」“The Rope” 等にみられる様な、人間の執念や欲望などに焦点が合わされており、又運命論者としての彼の人生観が打ちだされている。

中期には長篇を多く発表し、技巧、内容共に円熟し、彼の傑作の大部分はこの時代に書かれている。

後期に至って彼の目は内側へとむけられる様になり、超自然主義的な傾向が見られる様になった。「喪服の似合うエレクトラ “Mourning Be-

comes Electra”や「奇妙な幕合」“Strange Interlude”がその代表的なものである。

彼の名声が確立されたのは長篇劇曲、「地平線の彼方」“Beyond the Horizon”である事はすでに述べた。兄と弟と、弟と結婚する破目に落ちいった兄の許嫁の三人の織りなす人間模様、夢と現実とのくいちがいの悲劇は、それまでのアメリカ演劇の善人は栄え、悪人は亡びると云う決りきったハッピー・エンド的なメロドラマの思想を否定し、善人、必ずしも幸福には終らない事を主張して、新しい演劇的なアイロニーの在り方を示している。

この大成功に気をよくしたオニールは、翌年、1921年にやはり自然主義傾向の「藁」“The Straw”と「金」“Gold”，続いて「アンナ・クリスティ」“Anna Christie”を発表した。

この作品は二度目のピューリッガー賞を受賞したが、魔力的な海によって象徴される自然の大きな力から逃れようとして逃れられない船長の父娘を主人公として、人間の思想や意志が如何に自然の前では無力なものであるかを描いている。

1920年の「皇帝ジョーンズ」“The Emperor Jones”と1923年の「毛猿」“The Hairy Ape”の二作品は、前述の作品とはがらりと傾向を変えた表現主義的な構成を持つ斬新な実験的作品である。

前者はもと寝台車のボーイをしていた黒人が西インドの島で皇帝となって君臨しているうちに土人達の反乱にあつて森の中に逃げこんで死ぬと云う話で、黒人の心理的な体験を通じて、表現主義的な構成をもって描かれている。

後者はこの様式化の傾向を更に強めたもので、定期船の火夫、ヤンクを主人公として、過去の原始的な生活と理性が支配する文明との板ばさみになって、自分の居場所を求めて遂には動物園のゴリラの檻の中に入って死

んでしまうと云う自己分裂の悲劇を描いたものである。

1924年には劇作家夫妻の心理的葛藤を題材にした「夫婦」“Welded”と白人の娘と黒人の恋愛の中における人種的な劣等感をテーマとした「すべて神の子には翼がある」“All God’s Chillun Got Wings”を書き、男女間の理性では解決出来ない潜在的苦悩を心理的にこまかく描いている。

一般にオニールの全作品を貫いているテーマは夢に生きるむなしさであるが、それは従来のアメリカ社会でみとめられて来た道德感や人間観、即ち、伝統的なピュリタニズムの厳格さとフロンティア精神の楽天主義の上に機械文明がもたらす無限の進化の夢を抱いているアメリカ人の思想に対する否定である。

フロイド心理学の影響を受けているオニールは、その後の作品にも、人間の愛欲や物欲、ピュリタニ的な道德的概念によって認められていた様々な人間関係の上にもその思想を一貫させている。

これら中期の創作傾向の終りを飾っているのが、1924年に書かれた「榆の木蔭の欲望」“Desire Under The Elms”である。

この作品は初演の時、内容があまりにも背德的なので、上演中止を命ぜられ、ついには裁判沙汰にまでなつたと云う曰く付きのものである。

1950年代、ニューイングランドの75才の一農夫とその若い後妻と、先妻の息子の三人が、原始的な祖野な感情をもっておりなす愛欲と物欲の葛藤の中に、普遍的な人間性を描いている。

若い後妻と、先妻の息子との理性的対立、情欲的融合と云う矛盾した関係がこの劇曲の主軸となっているが、両者の情欲が二人の間に子供を誕生させる事によって、理性的対立に緊張を生じる。

しかし、女が男の心を取り戻そうとして子供を殺す事によってドラマは急激にクライマックスへと展開するが、やがては真の人間性に目覚める事によって終る。

親子の争い、近親相姦、嬰兒殺し等の暗い空気の中で、彼は登場する三人の主人公達に三枚の夢を持たせながら、ピューリタニズムの道德通念と異教的自然主義との対立を象徴的なセットの中で巧みに分析している。

その後、彼の作風は後期に見られる様な超自然主義的なもの、秘神主義的なものへと発展していくのであるが、1925年の「泉」“The Fountain”に於ける青春の泉を現世に求めて得られなかった主人公が自分の生まれ変りの様な青年と自分の昔の恋人の娘の中に永生の秘密を見いだす……と云うこの神秘的な生命観は、それから3年後に書かれた「百万長者のマルコ」“Marco Millions”の中に受け継がれている。

これはマルコ・ポーロをバビットと云う教養のない当世風実業家に見立てて諷刺した作品で、この中に登場する東洋人にやはり「泉」に於ける様な永生の生命の思想が見られる。

この作品は異国情緒の絵巻物的形式を用いて「泉」と共にオニールの作品のファンタジックな一面を表わしている。「偉大な神ブラウン」“The Great God Brown” (1926年)では物質的なものと精神的なものとの対立と矛盾を現世の成功者ブラウンとこれに対立するディオソとアントニの二人が夫々世間に対する時には仮面をつける形式によって表現し、現代の物質主義を批判している。

聖書の人物の登場させた「ラザレス笑えり」“Lazarus Laughed” (1928年)でも時間、性格の象徴に仮面を使用しているが、これらの作品も思想的には頂点に達した感があるが、劇曲そのものとしては充分こなされていない感がある。

1928年の「奇妙な幕間狂言」“Strange Interlude”では世界大戦で許婚を失った大学教授の娘ニーナが、精神病の血統のある夫、夫に秘密で関係を結び、子供まで生んだ若い医師、彼女に父親の様な愛情で接してくる小説家の三人の男性の中であって、そのどれにも真の情熱を燃す事が出来

ずに悩むが、やがて子供の成長夫は急死、医師は研究に熱中と夫々、自分の元から去っていくと云う小説風の大作である。女主人公の愛情の意識の流れを象徴的に表わしたこの作品は、第三回のピューリッパ賞を受与している。これらの作品には人間の苦悩が仮面や独白の形で進められ、迫力のある作風となっている。悲劇「ダイナモ」“Dynamo” (1929) は、新教徒から無神論者となり、科学に対しても信頼を失い、遂には人間性に対する不信のあまり巨大なダイナモの中に身を投げて自殺する若者を描いたものであるが、劇としては観念的に過ぎる失敗作である。しかし、彼の思想の偏歴を知るためには重要な意味を持っている。

その後、二年余り苦心に苦心を重ね、稿を数回改めてやっと 31 年の春に完成したのがオニールの最高傑作と云われている「裏服の似合うエレクトラ」“Mourning Becomes Electra” である。

これは時代を南北戦争の直後とし、舞台をニューイングランドにおき、ギリシャ悲劇、アイスキュロスのオレスティアをもとにして、フロイドの精神分析によって新しい解釈をほどこしたものである。

父母姉弟と、母の愛人と云う 5 人の人物が織りなす愛憎の複雑な心理関係、緊張感が、この劇全体にわたって見られる。

父の毒殺、愛人の射殺、母の自殺、弟の自殺と次々と死んで、最後に姉のエレクトラが一人、喪服姿で残り、やがて大きな柱の後に退場で幕が降りると云う雄大な構想で、仮面や独白によらず自己分裂に悩む現代人の苦肉を常々と異常な迫力で描き出している。

カトリックの中に真の信仰を見い出す男を主人公とした「限りなき日」“Days Without End” は 1931 年に書かれ、33 年には彼の作品としてはめづらしく家庭的な劇曲「ああ荒野」“Ah, Wilderness!” が発表された。

その頃から彼は健康を害し、神経疾患パーキンソン氏病のため 1936 年のノーベル賞も病院で受賞したと云われている。

彼の虚無的な人生観が最も明白に表わされているのが、グリニッチ・ヴァイレッツの安酒場にたむろしている人生の敗者たちをモデルにして書かれた「永人来る」“The Iceman Cometh” (1946) である。

彼の遺作となった「夜への長い旅路」“Long Day's Journey Into Night” は 1941 年に完成されたが、故人の遺言によって、彼の死後 25 年間は発表を許されない筈であったが、1956 年、未亡人の意志によって出版され、ストックホルムで初演された。

これは、1912 年頃、ニュー・ロンドンに於けるオニール一家の生活を描いたもので、そこに登場する人物は、オニールを思わせる胸を病む神経質な男、頑固一徹な役者である父、麻薬患者の母、酒飲みの兄と非常に暗い家庭が描かれている。

この様な異常な性格の人物ばかりを登場させ、各々の持つ悩みを告白させながらストーリーは発展していくのであるが、麻薬中毒の母親の中に、ダイナモに於ける母親とも共通した、オニールの女性観や母親に対する概念が理解出来る。

晩年はかなり悲惨で、神経疾患がはかばかしくなく、手のふるえが次第に全身にまで及び、遂には、執筆不可能な状態になり、何篇にもわたって一家の歴史を書くつもりで構想を練っていた“Cycle”も途中で止めてしまった。

私生活に於いても三度結婚し、子供達にも自殺されたり、アル中になられたりして恵まれる事もなく、1953 年 11 月 27 日肺炎で孤独のうちに生涯を閉じた。

彼の死後、上演された“Long Day's Journey Into”は四度目のピューリッパ賞をうけ、又、完成を見なかった“Cycle”の中から「詩人の血」“A Touch of the Poet”が 1958 年に発表された。

III

19世末のヨーロッパに於ける自然主義文学運動が演劇の革新運動につながり、様々な名称で呼ばれる近代劇場がヨーロッパ各地に生まれ、演劇が芸術としても又文学としてもあまり高く評価されず、独自のものも持たなかったアメリカに就いても次第にヨーロッパの影響をうける様になった。

既成の俗悪劇から一步進んだアメリカ独自の演劇をアメリカ人作家の手によって生み出し、発展させて行こうと云う運動が起こり、各地で小劇場なるものが誕生した。

こうした小劇場運動の中から多くの優れた劇作家が生まれ、今月のアメリカ演劇隆盛への道をひろいたのである。アメリカ小劇場運動はいわばアメリカ演劇史の畑であり、作家達はそこで地ならしをし新しい種をまいた。

そして一番に芽を出し、大収穫をもたらしたのが、アメリカ演劇の父とも云われているユージン・オニールではなからうか。

彼の緊密な作劇法は、後に生まれた多くの作家達に何らかの形で影響を及ぼしているのは否めない事実である。

BIBLIOGRAPHY

- 1) B. Cerf & V.H. Cartmell, *Sixteen Famous American Plays*. New York: Garden City Publishing Co., Inc., 1941.
- 2) Richard A. Cordall, *Twenty Century Plays British—American—Continental*. New York: The Ronald Press Co., 1947.
- 3) Alan S. Downer, *Fifty Years of American Drama*. Henry Regnery, 1951.
- 4) Winifred L. Dusenbury, *The Theme of Loneliness in Modern American Drama*. Florida: University of Florida Press, 1960.
- 5) George Freedly & John A. Reeves, *A History of the Theatre*. New York: Crown Publishers, Inc., 1955.
- 6) Edmond M. Gageo, *Revolution in American Drama*. New York: Columbia University Press, 1947.
- 7) John Gassner, *Masters of the Drama*. Dover Publications, Inc., 1954.

- 8) Glenn Hughes, *A History of the American Theatre, 1700-1950*. New York: Samuel French, 1951.
- 9) Joseph W. Krutch, *American Drama Since 1918*. New York: George Braziller Inc., 1957.
- 10) Stanley J. Kunitz & Howard Hoycraft, *Twentieth Century Authors*. New York: The H.W. Wilson Co., 1956.
- 11) A. H. Quinn, *A History of the American Drama*. F. S. Croft, 1936.
- 12) 清水 博: 世界各国史Ⅷ アメリカ史: 山川出版社, 1961.
倉橋 健: 現代アメリカ演劇論: 南雲堂, 1960.
現代世界劇曲選集アメリカ篇 I, II: 白水社, 1954.
現代演劇講座 第四卷, 第五卷: 三笠書房, 1962.
英米文学講座 二十世紀篇: 研究社, 1960.